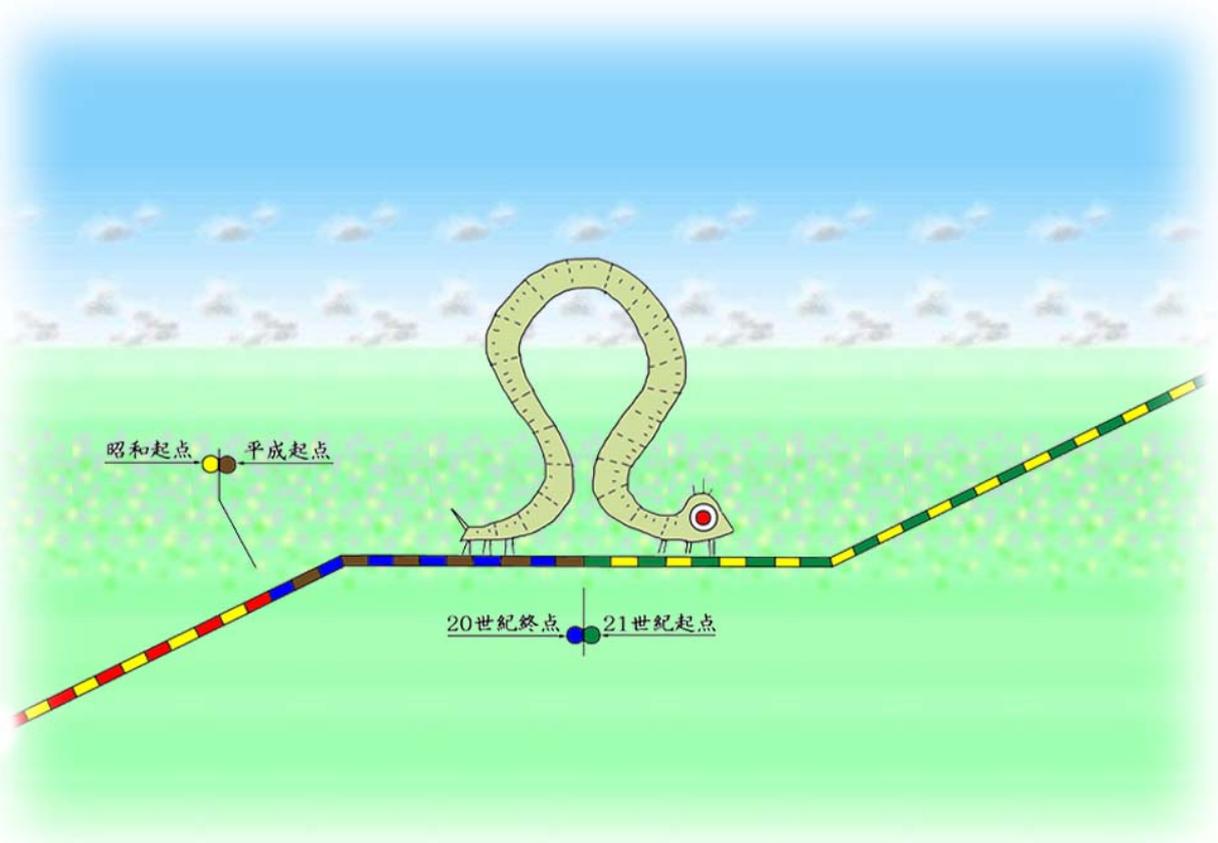


測り虫



瀬戸次郎

測り虫 著：瀬戸次郎

平成 14 年 3 月 2 日永眠。

昭和 26 年 5 月 小林測量設計事務所（現在の株式会社 小林土木工業所）に奉職。

弊社の歴史と伝統を築いていただいた、偉大なる 故 瀬戸次郎先輩の手記「測り虫」を
瀬戸夫人の了解を得て、掲載致しますので、是非ご覧ください。

終戦後間もない20世紀も前半の昭和26年（1951）5月、私は、かつての小林測量設計事務所に見習い助手（測り虫の幼虫）として勤務する事になりました。

当時の社員数は所長（前社長）を含んで、わずか6名でした。

渡島桧山管内の各町村役場関係の仕事を主にやっていたようです。（旧乙部村，熊石村，松前の小島村，楳法華村，尾札部村，臼尻村，知内村等）

従って、月末や年度末になると各町村役場へ汽車やバス等で集金に出向いて居りました。道路等は国道を始め、市内の道路もほとんどが狭い砂利道でした。この時代に車を持って乗回している人物と言うと、少し人気がある病院の「やぶ医者」ぐらいで、荷物の運搬物もすべて荷馬車が多く使用されておりました。

そこで、地方の現場に出張の際も、現在のような車社会と違って汽車やバス等の利用が多く、車内に持込む荷物もたいへんなもの。測量機械類を始め、三脚，ポール，函尺，測量杭，ツルハシ，スコップ，その他小道具さらに各自の手荷物と大苦勞でした。

市内現場も同じで電車やバス，自転車の利用が主でした。自転車の後にリヤカーを取付け道具一式を積み込んで現場へと向かったものです。

この頃、乙部や熊石の造田計画の測量によく行ったものです。又、戦後の混乱で品物がなく、お金があっても物が買えない時代でした。そこで物と物との交換が盛んで、例えば農家は米と衣料品，米と魚、漁師は魚と米，魚と野菜とか小麦粉と食パンと言った具合、すべて何でも物物交換でした。一方では闇のルートと呼ばれた闇市場があり、結構な品物が揃っていて、買う事は出来ましたが、値段があって値打ちがないといった物もあり、戦後のどさくさで金をもうけた商人は、その後も永く何かと羽振りをきかしていたようです。

映画館等も入場料が5円では税金がかかる為、4円99銭で二本立て映画が見られた時代で、よく会社の帰り、ボーニデパートの五階にあった『ボーニ・ニュー東宝』で当時流行の西部劇を見たものです。

「当時の会社」



さて入所後、最初の現場は忘れもしない桔梗町（旧亀田村桔梗）であった。

汽車に乗り、桔梗駅で降り、駅から山へ向かって歩く事一時間余り、現在の桔梗駅前通の上（中ノ沢）で、『製鉄ブーム』の頃で、赤沼鉦山という鉦山があり、鉄鉦石を運搬する為の道路の実測線調査であった。当日、測ったデータをその日の内に図化して、翌朝、工事の関係者に渡すとその日の内に道路が仕上がっていくと言う異例の仕事でもあった。

桔梗駅には膨大な量の鉄鉱石の山が出来、貨車に積込まれ室蘭の製鉄所へと送られたものでした。

同じこの年、福島川の河川調査もありました。又、国道の実測線調査もあり、上磯～渡島当別間（矢不來海岸）の長い距離。なにせ波打ち際ばかりで干潮時が勝負の作業で、いくら杭を打っても、満潮時には流されて全く無くなります。

これらの路線の山の上には、現在も尚、曲がりくねった旧道が残っています。その旧道をリヤカーに荷物を積み、その日に使用する杭等をリックサックに背負い、急斜面を海に向かってやっとの思いで下る。干潮と同時にチャンスとばかり裸になり杭打を行ない、縦断、横断と作業は進められ、満潮になる前に急いでまた山の上に登る。限られた時間だけに能率が上がらず、数ヶ月もかかりました。今でもこの附近を車で通ると、非常に懐かしく思います。

尚、この年代だったと思いますが、函館空港の滑走路の測量がありました。デントコーン畑の大伐開でした。地元住民の反対を押し切った強行測量であり、当時の新聞に写真が出ました。電車に乗り湯ノ川終点で降り、根崎を通り、今のように空港線と言った道路もなく、細い小路を現地へ毎日往復歩いて通ったものです。

現地には、膨大な量の角材で出来たロケット弾のような測量杭が運び込まれ、メッシュの間隔は忘れましたが、必死の杭打ちでした。

あの頃は、会社勤務の日は暇さえあれば、次の現場で使用する測量杭造りを何人かで行ないました。今のように完成した杭等が市販されていませんでしたので、自分達の手で作ったものです。まず、長尺の樽木や小舞を購入し、鋸で切りカンナを掛け、先を鉋で削って、ペンキを塗って乾かす。数日後、ペンキが乾くと縄で束ねて出来上がり。なぜか私は、会社に居る時は常に測量杭ばかり一生懸命作っていた覚えがあります。今、思うと私は杭造りが非常に上手でした。

又、現在のスチロンやエスロンと言ったテープもなく、代わりに竹の皮で出来た「竹鎖」と言う長さを測る道具があって、間とメートルの二種類があり、購入時には目盛りの間隔が少ない為、ヤスリで小さい間隔に傷を付けて、この目盛りに墨入れをする。この竹鎖は間もメートルも長さは20mでした。取り扱いが難しく、すぐポキンと折れると言う難があり、毎度針金で修理しては使いました。このような作業もよくやりました。

翌年の昭和27年、国道の実測線調査がピークを迎え、渡島吉岡～松前白神岬間の海岸線、しかも延長が長かった。前回の矢不來海岸以上の難関であった。この時、吉岡の新山米松さん宅には永い宿泊でお世話になったものです。

そんな事があって昭和29年9月、台風15号が津軽海峡を北上し、函館港を直撃して国鉄青函連絡船「洞爺丸」他4隻が沈没、1430人の尊い命が奪われました。この台風により山々の木がなぎ倒され、それから数年後には、これらの風倒木にあらゆる食するキノコが培え、永年に渡り秋になるとキノコの山が続き、毎年大量のキノコを採取したものです。尚、この年函

館では、北洋大博覧会が五稜郭公園を会場に開催されました。この年、土木現業所発注の松前町静浦漁港他8港の漁港指定区域の大測量があり、冬の寒い港での作業だった事を今も覚えています。

又、道道大沼公園鹿部線の大沼町上軍川から鹿部町宮浜迄の凍雪害防止工事の実測線調査、これも同じ冬の雪の中でした。上軍川から宮浜まで毎日てくてく歩いたものです。そして、道道大沼公園線の銚子口から月見橋迄の道路改良工事の実測線調査と用地調査も数年間に渡り続けました。

昭和30年代に入り函館営林局の林道実測線調査が始まりました。（昭和31年～昭和59年迄）この間約29年、渡島桧山管内の山々を股にかけ、155本にも及ぶ林道調査を行いました。実に総延長約380km以上にもなります。

この年の秋、室蘭営林局の発注で幌別林道（登別温泉の隣）がありました。当時の汽車ポッポに揺られる事約10時間余り、調査延長も7kmと最大の長さであった。

翌昭和32年頃から土木現業所発注の道道江差～木古内線の改良工事の実測線並びに用地調査が始まり、継続工事の為、数年間に渡り続けました。

「ちょっとヤバイぞ、気をつけろ！」



さて、林道の調査は毎年五月の連休明けの発注が多く、今年はそのどちらの方向の山が当たるかと思うと入札が楽しみでした。いざ、現場に乗り込むと明けても暮れても、ただひたすらに笹藪との闘いだ。ひ熊の目撃、そして遭遇、藪蚊やアブ、蜂、マムシ等の襲撃に会い危険な個所を命懸けで進む毎日だ。

当時は、ほとんどがテント生活でした。林道の行き止まり迄、車で荷物を運び、荷物を降ろすと車（車は運送業者か工藤組のダンプカー）は帰ります。一寸淋しい。テント用具一式、ストーブ、ナベ釜類、食器類、調理道具、食料品、テーブル、製図板それに各自の寝具、測量道具からなる一般家庭のそのものである。車から降ろされた荷物は、さらにテントを建てるのに最も適した地形の良い場所へと人力で運ぶ。これが大変な重労働であった。

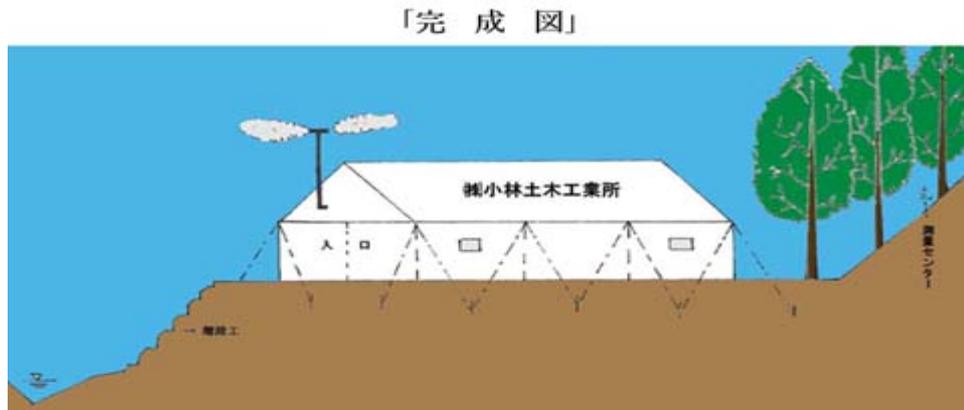
テントと言っても一般にある一本支柱のものとは違い、支柱がなんと11本もある。坪数にして6坪分、畳12帖と言う大物だ。6人位は楽に寝起きが出来ました。

設置場所も川が近く（生活用水のある所）水害等の無い平坦な場所が選点される。草や笹を刈り整地をする。平らにした処に角材を並べ、敷板を敷き、その上にゴザを敷いて我々の寝る御座敷の完成だ。

あとは支柱を建て屋根を張って、外廻りを囲み、外側に杭を打ち込みロープを張って固定する。これで生活の場が出来上がり。完成まで2時間以上はかかる。大変な上棟式だ。お餅蒔きはし

ませんでした。

やっとの思いで苦勞して建てたテントが台風等で飛ばされ、倒され寝具やその他の物が水浸しになった事や、雪の重さで押し潰された事も何度かありました。



さて、テントの落成式後、全部の荷物をテント内に納め、今度は日の暮れない内に、全員で近くの山へ焚木を集めに入ります。

山中を歩いて乾いた燃えやすい枯木を大量に拾い集めます。集められた焚木は鋸や鉋で切り、テントへと運ぶ。雨でも降るものなら燃料が濡れて炊事が出来ず、大変な事が起きます。

当時は、プロパンガスの無い時代。こうして現地採集した焚木は大事にトタン等を屋根にかけ、濡らさないように積んで置く。寒い時期には暖房用に使用され、たちまち無くなる事も何度かありました。明日からは、作業終了後の帰り道に全員で少しでも焚木を拾い集めて帰る事にしよう。

もちろんここは山奥である。電気も無く、灯は石油ランプとローソクのみである。

皆で集めた焚木で怪しげな夕食を急いで作成し、ランプに灯が入り、乗り込み時の酒を飲み、怪しい山賊料理の食事が始まる。

と、その時である、夏の場合はアツと言う間にあらゆる虫の大群がランプの灯に向かって乱れ飛び食物の中などお構いなし、そのまま食べた事も何度かありました。

これからが山賊共の生活の始まりです。

先程、焚木集めの時に乾いた木の根っ子を一個拾って来ました。これをテントの外に置き、この木の根っ子にランプの灯油を少しかけ火を付けて、生の草や木の葉を被せる。見る間にモクモクと煙が立ち上る。これは何の呪かな？実はこの煙、熊や虫除けの煙幕である。朝方迄煙は出ています。但し山火事には嚴重な注意が必要です。テント内は一夜に何個もの蚊取り線香が焚かれます。天下の「測り虫」も、この殺虫剤には弱い。このようにして何とか夕食が終わると、すぐ明日の準備が待っている。懐中電灯を手に、今食べ終わった食器洗いと明日の朝と昼

の米を研ぐ為、沢の中へと下る。すでに外は真っ暗闇だ。沢水が最高に冷たい。小魚が指に触れる。この作業が山賊共の今後の日課だ。

やっと終わって沢から上りテント内に戻る。少し疲れた体でフンを敷き横になる。只一つの楽しみはラジオを聴く時だった。ラジオも廻りの山々が高いのと、テントが谷間にある為、音声が非常に聴き苦しい。それに当時のラジオは鉱石ラジオかトランジスタラジオである。あの頃はまだ民放もなく、NHKだけでした。番組も落語とか講談、浪曲と言ったものばかり。プロ野球のナイトゲームなど全くない頃で、それもかすかに聞こえる音声でした。

やがて夜も更けて山全体、天と地が一つになりまさに黒一色となる。秋も深まる頃のテントの外は星空の輝き、草むらではコーロギや鈴虫、キリギリス達のコーラスの音色が山全体に響き渡り、やがて今年も冬の足音が近づいて来る。春から秋にかけての山の夜は夜光性のフクロウやバンと言う水鳥達の活動が始まる。ホーホーとフクロウ、キョッキョッと沢の中を猛スピードで小魚を食べ歩くバンの鳴き声が闇の中から聞こえてくる。あとは、せせらぎの音だけでシーン。

今夜はまだのんびりですが、やがて伐開が終わり中心線が決定すると、毎晩その日のデータをランプやローソクの灯の下で計算し、図化しなければなりません。この灯の下でマージャンを闘った選手も居ました。当時は現場にいる内に成果品（素図）を全部作成してその場で現場と図面の検定を受けたものです。あとは会社へ帰ってからインキングや青焼き、そして型入をして成果品として提出する。

さて一夜が明けて、私は4時に起床、昨日現地採集した焚木で飯を炊く、火が強過ぎて焦がしたり、火の燃が悪くメッコ飯になった時も何度もありました。各自の弁当を詰め、おかずはご飯の上に焼いた塩マスと梅干、紅生姜をのせて出来上がり。やがて6時頃、皆共を起床させ、川で顔を洗い朝食となる。味噌汁も作ってあるでよ。

本日は現場作業の初日だ。各自、弁当を腰に付け、鉈を下げ、鎌を持って、いよいよ山賊共の出陣だ。いざいざ……

何と言っても、今と違って物のない時代だけに三度の食事には最高に苦労しました。人それぞれ口の好みがある事で……甘いとか、やれ辛いとか、硬いの軟いのと、必ず一部で文句が出る。これが一番の悩みであった。料理の達人に向かって！

乗込時の食料も米を始め、味噌、醤油、砂糖、塩、食用油、缶詰類、干麺、塩魚、漬物類、野菜と言った物。冷蔵庫がないので生物はすぐ駄目になる。調査の延長で日数を考え、それよりやや多目の量を仕入れて持参するのですが、時には底をつく事も何度かありました。今のよ

「山賊共の出陣式」



うにカップ麺やボンカレーがあったら良かったと、しみじみ思います。又、スーパーやコンビニも現在のようにあったら、こんなに悩まずに終わったでしょう。

初日の作業も無事に終わり、焚木を拾ってテントへ帰る。夕食の準備だ。今夜もランプとローソク、蚊取線香の煙と、毎晩が「お通夜」のようだ。チーン……

時々、夜に会社へ電話連絡の為、下山します。当時は徒歩で10kmや20kmの距離を歩くのは、ごく普通でした。鼻を撮まれてもわからない真っ暗闇の山道、自分の目だけがギョロギョロと光る。懐中電灯を手に夜の山道を往復、大声で唄を歌いながら一人スタスタと進む。途中、怪しい小動物がこれも又、目だけをキョロキョロと光らせて道路を横切って通過する。恐ろしいと思った事は一度もありません。林道は勾配が急な為、下りは比較的早く到着します。早速、社長に作業の進行状況を電話で伝えて、帰り道近くの商店へ立ち寄り、タバコやおかず、菓子、薬品等を購入してリックサックへ入れ、背負って、又歌いながら一目散で山奥の我が家（テント）へと向かって歩き出す。帰りは登り勾配なので汗だくです。この電話連絡は10日に3回はありました。雨降りなどは日中にカッパを着てよく下山したもので、個人的な注文物もしばしばあって、現西武測量の社長の坂本氏などは好物の油揚げやサンマの開きをよく私に注文したものです。

雨降り等で作業の休みの時は、体ものんびりするのですが、達人が腕によりをかけて山菜の天ぷらやお汁粉とかカレーを作って食べます。時季には季節の旬の山菜やキノコが山程あり、見るのも嫌になります。ある時、退社後、風の便りではベトナムへ行ったと聞いた浅岡君に私の作品であるサケ缶とキノコのカレーと山菜の天ぷらを試食させた処、すっかり気に入って喜んで食べた事もありました。

テント生活も楽しいのですが、季節の変わり目、山で降る雨は只ものではない恐ろしさだ。局地的大雨になるのだ。たちまち沢水は増水し、濁水となり、飲水が不足し大変な事になる。猛烈に降り出す山の雨。夜中であろうが、すかさずテントの屋根から落ちる雨水をバケツやナベ等に受け飲水として使用した事も何度もありました。

沢水の濁が取れ、きれいになる迄は数日かかります。遠くの川へバケツを持って水汲みに向いた事もしばしばありました。バケツが重い重い。

今思うと、怪しげな山賊料理を食べ、濁った沢水や雨水をがぼがぼ飲んでも食中毒やエキノコックスと言った病気にもならず、怪我もなく過ごしたのは、さすがに山賊だ。

夏場は猛暑の中でも蚊やアブの襲撃を防ぎ体の肌を出さず、完全武装ですから汗ですごい。その汗の臭いで虫共が集まる。長い日数、山では風呂には入れません。その為どしゃぶりの雨の中、全身に粉石鹸を付けて雨中シャワーをした事もありました。又は、川へ飛び込む。非常に冷たい。ドラム缶の風呂も使ってみたが、煙が目に入り駄目でした。

トイレは、各自で草原をスコップで穴を掘って用を足す。今のようにトイレットペーパーなどある訳がない。良くて茶ちり、又は古新聞紙で終わらす。早く用を足さないと尻を蚊が刺す。これがまた特別にカユイのだ。

一ヶ月近くも滞在すると穴は何個も掘らなければ数日で満タンだ。土をかけ新しい穴を掘る。だんだん掘る面積がなくなる「うん」を天にまかせ最後は測量センター近く迄。なんと「うん」の良い山賊だ。しかし今思うと大爆笑だが、これも又、日常生活で人生最大の大仕事であった。

「蚊とアブで野帳が書けない」



さて、ここで新入社員が入社。一発目の現場は林道調査での初体験と言う当社の掟があった。この恐ろしい体力的「国家試験」に合格しなければ、いくら頭脳が良くても半人前とみなされる。履いた事もない地下タビを履き、使った事もない刃物を腰に付け、朝夕、沢水の中を腰迄水に浸かりながらの往復だ。しかも山の尾根の上では、ひ熊が叫び、土や小石を歩いている沢の中へと落とす。足元には蛇が居る。虫共に刺され、顔や体は草やウルシ等に負け、慣れない足つきで危険な深山を歩いての作業は、全く無理な事「もう我慢出来ない」「堪切れないよ…」現代人には、原始人のような山賊生活は絶対勤まらない。もう駄目だ。速やかに下山して下界の人間になり、街中の測量を勤める事となるのだ。余りの苦しさに堪えられず一日か二日で下山する人達も大勢居ました。中には、夏休みに大学生のアルバイトが山に出現し、「僕は大学の山岳部に籍を置く」と言う怪物君ではあったが、わずか三日で「さようなら」又、ある若者は山へ来て「美しい山だね」と言ったきりでダウンして、これ又「さようなら」観光地じゃあるまいし、仕事だよ。いくら山が好きでも、山は生き物だ。平坦な地形ばかりがある訳ではない。そんなに甘くないのだ。

結局、この新入社員の「体力テスト」は合格者が少なく、この中から合格者を選抜するのは非常に難しいとの事になった。しかし、この後もテストは何年も続いて行なわれた。

なんと言っても地方出張になると、毎回寝具をフトン袋に詰め、下着類をバック等に入れ持ち歩く。旅から旅の渡り鳥であった。

やっと、一本の現場が終わり会社へ帰ると、すぐ次の行き先（現場）が待っています。翌日そのまま荷物は次の現場へと運び込まれて行く。一年中この繰り返し。家族の顔も満足に見ない一年間である。当時は年間320日にも及ぶ出張日数であった。

痛いもカユイもあるものか。行かねばならぬ人生だ。

我々、山賊共も現地滞在中に於いて天災による恐ろしい体験も数々ありましたが、昭和34

年頃、真駒内川林道（現在の北桧山町、道道矢淵東瀬棚（停）線）でのことである。

地形が悪く、現場作業が難航していた矢先の事。夜、突然襲った台風での局地的集中豪雨により、世話になっていた監督員詰所の屋根がすっぽり剥がされ、すさまじい雨が室内に降り注ぎ、生活するには全く無理な状態となった。次に外はと言うと、地鳴りと共に山が崩れ、川は氾濫して延長約40kmもある林道も各所で土砂崩れ等により寸断され、交通不能となった。

やがて雨も止み、屋根のない部屋の上を見ると、星空がきれいに見える。

翌朝2時頃からオニギリを手に体で持てる物を最大限背負って、被災した道路をスタコラ歩き始め、途中熊も通れないと言う熊戻り橋で朝食を取り、無事に東瀬棚駅へ到着したのが夕方であった。その後、列車を待って何とか生きて函館へ帰りました。若さであった……。

尚、この年昭和34年（1960）皇太子（現在の天皇）御成婚。同年、松前町役場の町有地の測量が白神から原口迄、山程あって何回となく足を運びました。

又、この時代になって、ラーメンなる物が出現し始め、粉末ジュースと言った物も出始めた頃だった。

昭和35年、10年間の見習期間も終わり、測り虫も幼虫から脱皮して成虫になる頃、小樽土木現業所の指名で今では日本の名水で知られる「オロウエンシリベツ川」の河川調査がありました。

倶知安から旧国鉄胆振線で当時はC11蒸気機関車とレールバス（ディーゼルカー）が走っていました。

列車内には石炭を焚くダルマストーブが取り付けられてあり、そのストーブで行商人のおばさん達がイカや干魚を焼いて食べてました。

このレールバスが線路のそばで手を上げると駅でなくても、どこでも停車して客の乗降が出来ると言うノンビリ列車であった。

そこで我々はアスパラの里／喜茂別町御園の農家に陣を取り、相当な日数を過ごした覚えがあります。

昭和36年、この年も多忙な一年であった。この秋、瀬棚から国道229号線を茂多岬方向へ向かう途中に島歌と言う所があります。その島歌川林道での出来事です。

現場作業もあと二日位で終わりに近づいたある日、いつもの山道で一匹の狸を発見。持っていたポールで叩いたところ、狸はコロリと倒れ、死んだようになった。これぞまさしく「狸寝入り」である。

帰る日も間近なので、生捕りにして、函館の良い子へ持って帰ろうと思ったが、その後、必死に暴れ出し私の手の指などに噛み付いた為、ただちに私は腰の鉈を抜き、狸の脳天を割り、永久に楽にした。従って、皆との話し合いの結果、狸汁にする事になった。しかし、狸汁には酒

がつきもの函館に帰る日が目前だったので、誰もが金欠病だった。そこで、皆の有金をはたいて何とか四合瓶を購入。やっと、狸汁にありついた。なんとも美味でした。二度と食うことは出来ないだろう。

ところが、ここで問題があった。狸は食ったが、その毛皮が残っている。この毛皮の所有権は誰なのかという事になった。結局、最後の話し合いで第一発見者の物と決定し、柳町氏の奥さん「律子さん」の襟巻となった。殺屋は狸汁のみであった。この毛皮、加工賃も結構かかりましたが、立派なものでした。

同じこの年の夏と秋の二度、台風にあいました。夏は知内町湯の里の湯の沢林道。

林道工事の作業員宿舎に同居して居たところを台風襲われ、大きな宿舎の屋根が全くなり、寝具等はズブ塗れとなり、道路は各所で決壊し、川水が増水して、全く交通不能となった。やむなく、山を越え川にロープを張って川越をして、命懸けで避難した事もありました。天候回復後、又現地へ出向いて作業を再開して無事完了。

秋には乙部町栄浜の突符川林道で、これも大豪雨により砂防ダムは壊され、山は土砂崩れで測量センターは流され、壊滅状態となった。国道も各所で寸断され交通がマヒ状態を起こした。測量センターは土砂と共に押し流され、全線再測となり、会社も我々も大打撃であった。

この昭和36年函館空港が供用開始となり、指の運動と称する『パチンコ』が俄然大流行し始めた。

又、北洋漁業もピークに達した頃で、北洋サケマス船団が函館港に集結し、出港・帰港の時などは、物凄い賑わいを見せ、景気の良い船員（漁師）達が羽振りをかきかして飲食店街を勢い良く飲み歩いている時代でした。又、この時代、日本酒がコップ一杯30円で、100円あれば10円で3枚のセンベイをかじりながら、3杯も酒が飲めた。たまには、山から下りて来た。

我々、山賊共は常に金欠病という困った病気の患者達であった。山に入ると全くお金は使わないはずなのに、なぜかしら？

そこで山賊共は、おでん屋さんと契約を結び、店で必ず使う山菜を季節が来ると採取して運び込むのだ。

フキ、ワラビ、キノコと言った山菜を山から、しかも只で採取し持参する。そして、その代金分を何日間も飲み食いするのだ。

新鮮なことで店には喜ばれました。

今思うと、地下タビを履き山賊スタイルで大門通りを飲んで歩いたものだ。

この頃には、まだ赤線地帯（パンスケ街）「売春婦」もありました。

「山ばかりで女性の姿は見えない…」



日没ともなると音羽町通りから大門の裏通り、そして大森町附近の街角に怪しげな女性達の群が出没して、金のありそうな良いカモの通るのを一人一人見つめ声をかけるのである。

「いい娘いるよ。サービスするよ。」と客引女共で毎日弱ったものである……。女性の裸踊り「ストリップ」が最高潮に達したのも、この時代でした。又、港祭りも7月に行なわれて居りました。花火大会やパレード等が始まったのは、これから2年位後でした。

道路等も国道5号線の改良工事がやっと始まり、函館から七飯町峠下附近まで舗装工事が終わった位で、その先は延々と続く砂利道で車が走ると先も後も見えない、ホコリ街道でした。まだ機械施工より人力施工が多い時代でありました。旧大沼トンネルも確かこの年に掘り始めた覚えがあります。

日本でのテレビジョン放送が始まって間もない頃で、わが小林家では東川町内ではトップを切ってテレビを購入し、当時はまだ白黒テレビでしたが、近所の子供達が大勢集まり、プロ野球のオールスター戦などを珍しそうに見に来ていました。

小林家はこの年迄、現在の会社の裏（多田さん宅）に住んで居ました。犬やら鶏まで養って居ました。私は、この頃の事を思うと非常に懐かしくてなりません。

昭和37年（1962）当社にも夢にまで見た待望の自動車が購入された。

もちろん、中古車ではあったが、非常に喜ばしい事であった。車はマツダの6人乗りトラックである。

初代ドライバーは、現五稜測量社長の湊氏である。ところがこの方、地方現場を走っては事故ってばかり、結局、翌昭和38年入社の大内氏にバトンタッチ。このトラックに先代の社長が乗って、役所廻りや現場視察と、楽しそうに走り廻っている姿が今でも目に浮かびます。

又、この年の夏、社長の母（現社長の祖母）が亡くなりました。良いおばあちゃん、私は一番可愛がられました。

同じくこの年、土木現業所発注の長東線（長万部～東瀬棚）間（現在の国道230号線）の用地調査が数年間に渡り続き、石標埋設が大変でした。又、土現今金出張所管内の金原地区を流れるパンケオイチャヌンペ川の河川用地測量も、この頃でした。伐開に大苦勞した事を忘れません。

林道調査の発注も相変わらずで年間10本にも達し、大忙しで飛び回りました。

さらにこの年の秋、上ノ国町湯の岱の上の沢林道の山奥で、ひ熊に遭遇。

しかも、熊に体当たりをくらい、倒され横転したが、幸い怪我もなく無事だったが、髪の毛が一本立ちとなり、背中から水を被ったようになりました。

丁度この日、地元の営林署の係長達が作業現場を見に登って来る予定日で午後3時頃、ガサガ

「ひ熊対策”爆音器装置”義務付」



サと笹の葉の音がしたので、来たのかなと思った瞬間、目の前に熊が現れたのだ。結局当日は係長一行は来ませんでした。

作業は二班に別れ、縦断、横断と別々でした。私は縦断、他の人達は横断でした。ところが宿舎に帰りこの事件を話すと、他の人物達は「何の証拠もない」と本気にせず、頭に来て翌朝早々、1人でその熊の現れた滝の上の場所迄行き、証拠になる物（例えば毛等）を探しましたが見つかりませんでした。その後、私は熊に対しての度胸が付き、体全体に鋭い電流が走り、熊対策人間となった。さすがは山賊だ。

この出来事を家に帰り、妻に話すと顔が青くなり「こんな山男と一緒に暮らすのは、もうイヤ。」と言われ、がっ

くり…ショック。しかし、山賊は山が大好きだ。大自然は俺の命だ。俺から山を取ったら終わりだ。山が俺を呼んでるぜ。

この以前もその後も、何度も熊ちゃんにはお目にかかりました。

尚、この年（昭和38年）頃から現在も続いている大相撲初場所の星取り勝負が始まりました。

結婚も柳町氏、そして私、続いて渡辺氏、林氏と当社も結婚ラッシュの嵐でした。それから少し間があり、坂本氏、長谷川氏、脇谷氏、中沢氏、村上氏、小泉氏と言った順に続きました。この当時は、毎年新年の元旦には全社員が会社へ集合する恒例の儀式がありました。東照宮・函館八幡宮・護国神社と三社を参拝したものです。その後、社内でお神酒を戴いて各自帰宅するのである。

明けて昭和39年、我々林道班にも待ちに待った自動車が配備される時がきた。

当然「おさがり」の車である。この頃になると、次第にテント生活「山賊暮らし」も少くなり始めました。しかし、場所の都合によっては、相変わらずテントを張るのは続きました。

車が配備され初めて乗り込んだ林道が乙部町の姫川林道で、やはりテント生活でした。ランプの灯を車のヘッドライトでとエンジンを掛けライトを照らして夕食をした覚えがあります。

この夏には無理と過労で体調を崩し、40日間入院生活を致しました。退院後、病上がりの体で新川排水路の測量現場で、体がフラフラの状態で作業した覚えもあります。

この年、昭和39年（1964）10月にはアジアで初の東京オリンピック夏季大会が開催され、全世界の選手団が日本に集まりました。我々、林道班もこの大会をテレビで一目見ようと、遠く熊石町の見市二股林道から未舗装のガタガタ道を一路函館へ向かい、当時『東洋の魔女』と言われた、日紡貝塚の女子バレーボールを見て感動したものです。

翌昭和40年、第一回目の久根別川河川区域調査が行なわれ、河口から鳴川の合流点迄、約10km。雪の中での仕事でした。林氏は新婚時代で、現場で何を思っただニヤニヤしてばかり。同じこの年、道道函館南茅部線（通称川汲峠）の実測線調査が始まり、数年間続き、トンネルを含む川汲の市街地迄の大測量でした。季節が夏もあれば冬もあり、トンネルを掘る前の縦断測量なども毎日山に霧がかかり、観測が出来ず難航しました。横断測量も急な山の斜面から巨大な深さの沢中迄と重労働の連日でした。又、この路線の工事も重機など余り無い頃で、ほとんどが人力施工。

刑務所の囚人を使っただの工事で、我々測量班も伐開用の刃物を出来る限り囚人達に見せない様にと看守に注意されるなど、少し恐ろしい思いをしました。

私のようにすぐ笑う人間は特に危険でした。笑顔で囚人達の前を通過したりするものなら、「貴様ら」……

工事終了後も、この路線の用地調査等が何年間も続き、鉄山から川汲迄、石標埋設等によく出向きました。

「シパレル」



「偶然、俺と同じ名前の林道だ」



昭和41年に入り、少人数であった社員数も二倍近くに達し、仕事の方も各所に国道のバイパスの調査が始まり、又そのバイパスの為の旧道の不用物件調査も出始めた頃でした。

この頃になり、光波測機儀なるものが出現し、当時はびっくりしました。今迄は、トランシットにテープという立派な道具で永い年月を馴染んで来た私達には只驚くだけでした。

尚、当社に光波が導入されたのは、まだ少し後のようでした。我が林道班は最後の林道調査迄、光波は使用せずに終わりました。

急斜面での持ち運びが非常に困難でもあり、又、それ程の精度を執用としませんでした。

この当時は会社の年中行事と言えば現在と同じ恒例の大相撲初場所の表彰式と新年宴会が、毎年、大森町の『雅叙園』で行なわれ、春五月には花よりダンゴで湯の川温泉『太陽館』でお花見会が盛大に行なわれておりました。楽しい良き時代でした。

昭和41年、道道函館上磯線（産業道路）の用地調査が延々と何年間も続きました。当時は車が一台やっと通れる位の道巾で現在の白百合高校の附近はぬかるみの道で廻りは全部馬鈴薯畑で亀田支庁の前から亀田中学校附近迄が赤川飛行場の滑走路であった。

用地の巾杭を打った時、こんな広い巾の道路を何の為にと思っていたが、今では全く狭くなり交通量も市内では最も多いNo.1である。現在では交通事故多発路線としてもトップである。

又、函館空港線や戸井町小安から汐首迄のバイパスの用地測量もこの頃でした。

それに、湯ノ川の松倉川河口での潮流調査が一年を通して朝ター一日二回、雨の日も風の日も正月の元旦も休むことなく行なわれました。

河口の沖合にアンカーを沈め固定し、手製のブイを浮かべ旗を取り付け、陸地の基準点からトランシットで左右の旗を見て潮の流れの角度とブイに取り付けたポールの目盛りにより波の高さを観測する作業であった。

時には、台風の接近や通過後は大時化で目標物が見えず、観測不能と手簿に記入した日も何日もありました。この年の秋、厚沢部町清水の山道で工事中の道路の敷砂利にハンドルを取られ、車が素掘りの深い側溝に横転し、右腕を痛め約三ヶ月近く右手が使えず泣きました。この時は、二度とハンドルを握りたくないと思った年の暮、これ迄四年間、夏も冬もバイクに乗り会社へ通勤していましたが、遂に乗用車を購入。しかも新車。ハンドルを握りたくないなんて全くウソだ…今思えばバイク時代も転倒して足を痛め函病へ永い間通院した事もありました。

昭和42年、この年代には当時も今も同じですが、最も庶民の贅沢品とされてる自動車も社員各自が次々と所有する時代となり、猫も杓子も車を持つスピード社会へと移り変わった。その頃、山越海岸保全区域調査がありました。林道調査は相変わらずの発注でテント生活は続きました。

「何やら怪しい殺気を感じるぞ」



ある日、厚沢部町の山奥のガマの沢林道で例によりテント生活をした時の出来事。

一日の作業を終えて夕方テントへ戻ると、何者かがテント内に侵入し、鍋や釜の蓋を取り、中にあったご飯を全部食べて行った形跡を発見！

やむなく急遽、設計変更してその夜新しいご飯を炊いて食べましたが、この仕業の犯人は調査の結果、なんと山猫であった。

人里はなれて捨てられた猫が、やがて野生化して他の動物をも襲う山猫となるのだ。

翌年度の発注が決定した山に冬の内にスキーで路線の踏査がよく行なわれました。冬山は木の葉もなく見通しが良いので勾配を測りながら、スズランテープを張り、目的地まで進む。翌春雪も消え入札と同時に現地へ乗り込むと、なんとその張ったテープがはるか見上げる木の枝の高い所にあるのだ。市街地と違い山は積雪量が数倍も多い。これにはビックリしたものです。

又、前年度に測量を終わり、今年度工事中の場所にはテントが張れず、工事現場の業者（組）の作業員宿舎（飯場）や工事の監督員詰所等にも数多く宿泊でお世話になりました。

工事現場の作業員の中には面白い人達も沢山居ましたが、反対に恐ろしい人も多く見られました。

地方からの流れ者が多く、夜、酒が入ると時々夜中に大声を張り上げて喧嘩が始まり、何度かビックリした事もありました。でも、翌朝になり朝食の時にはケロリとした顔で「お早うございます」みんないい人達でした。

尚、この頃新年度の新しい仕事の発注前に松村氏を会長とする社内旅行が毎年この時季にあり数年間続きました。

最初の頃は、自家用車4台で道内の身近な所、登別温泉、洞爺湖温泉、支笏湖温泉などを廻り、その後、津軽海峡を深夜0時05分、今はなき国鉄青函連絡船で渡り、弘前公園の花見や古牧温泉、落合温泉、岩手県、仙台、東北みちのく、金華山、常盤ハワイ等で全て一泊二日の強行軍で見て廻り、行きは良い良い帰りはこわい。帰りは全員フラフラ状態。

しかし、毎年楽しかった行事の一つで今は懐かしい思い出です。

昭和44年、開建の木古内町泉沢（亀川）～札苅（大平）間の用地測量があり、その後、数年間に渡り続いた。又、この区間の不用物件調査も続いて行なわれました。

道道石崎松前線（上川地区）や大野川の敷地調査等もこの頃でした。

さて、その後の山賊共はこの年の夏、八雲営林署館内の最も根曲竹の産地で有名なペンケルペシュベ川林道へと乗り込んだ。

地形は比較的良いのだが、果てしなく続く竹藪。そして、真夏の猛暑。

この夏は雨の少ない日照りの多い年であった。ざっと3mを越す竹藪の伐開が来る日も来る日も続く。

契約延長が2kmで民有林を抜け、国有林の入口で終点となる。しかし、行けども行けども目的地の国有林には到達しません。

伐開を始めて40日が過ぎ、やっと国有林が見えた。直ちに予測を開始した。

「雪の中では人間も熊に見える」



ところが契約延長の2kmが、なんと3.5kmも多い5.5kmにも延びた。設計のミスであった。すぐ設計変更が行なわれ、金額も3倍近くにもなった。前代未聞であった。いずれにせよ、永く暑い闘いであった。

連日の日照りで川水が少なくなり、川魚もお湯に近い水温の中、手掴み出来る程に弱って泳いでいました。

この時、会社から総勢7名という林道調査で最初で最後の人数をつぎ込んだが、暑さと竹藪に全員体力がバテて悲鳴を上げた。

今では立派な林道が完成して、季節には旬の竹の子狩りが有料で楽しめる山として道南では有名になりました。

「測り虫」に生まれ変わってから、こんなに難航した山は始めてであった。尚、このペンケルペシュベ林道は、その後も、この先の延長線と支線の調査が3年位続きました。

この測量という職業は何故か不思議と意地悪なもので、夏は暑い山の中や街中の焼けたアスファルトの上、冬は寒風吹きすさぶ河川や海岸での仕事が多い。非常に嫌がらせである。

さてこの年、昭和44年（1969）アメリカの宇宙ロケット「アポロ11号」が月面着陸に成功した。

アームストロング船長だ。この様子をテレビで見ても世界中が感動しました。

翌昭和45年（1970）1月、新年宴会と恒例の大相撲初場所の納会の席上で、私は林道調査100本達成記念として、会社社長より記念の盾を戴き、人生最大の名誉に輝きました。今後も永く続くであろう山賊生活に一生懸命会社の為に尽くすことを硬く心に誓った日でした。

想えば色々な事がありました。

ある時、湯の岱の善棚左股林道でのテント生活で、坂本氏や小泉氏が川の小さな魚を手掴みするのに追いかけて廻し、やれヒラメだのサンマだのと、服の袖を濡らして追いかけて、大笑いした事もあった。こんな山奥の川にそんな魚がいる訳がない。

又、この林道で私の連絡用のバイクのガソリンが無くなり、坂本氏に給油をお願いしたところ、間違えて石油を給油され、ガソリタンクを洗浄するのに大金を払った覚えがあります。雨不足の年は沢水も枯れて少なくなる為、ポール等で川魚を徹底的に追い込むと魚も疲れ切つて、最後には川岸から地上へと飛び上がります。そこを手で掴む。

脇谷氏と行った神明の沢林道では一日の作業が終わったの帰り道、必ず行き帰り沢中を歩く為、結構の量の川魚が毎日手掴みで取れます。旅館泊まりであったので、夕食のおかずには焼いてもらい、味わって食べたものです。主にヤマベかイワナ類でした。「急に食べたくなった。」

「林道調査100本達成記念」



又、テント生活でテレビが見たくてテレビを山へと持ち込んだこともありました。発電機で電気を起こし、クモの巣アンテナを針金で作し、カラ松のてっぺんに取り付け、NHKの連続物で高橋英樹の時代劇「鞍馬天狗」を見ようと試みたが山奥の為テレビ電波のキャッチが出来ず全く写らず、大失敗に終わった。必死になっての失敗だけに小泉氏と大笑いしました。

昭和45年、この頃から地方現場の出張は函館市内を除く近郊の町村（大野町、上磯町、森町、南茅部町、鹿部町、戸井町、木古内町等）も全て宿泊しての作業となった。

大野町の種田旅館へ泊まった時など七飯町の我が家の屋根がはっきりと見えたものです。やがて、旅館や一般の民家へ宿泊する時代となったが、又ここで悩みの種が増えた。

今度は、土現や開建、函館市の仕事が多くなり、会社がこれらの為に入札があると私はすぐ現地へ向かい、泊まる宿探しと人手探しを地元で行ないました。

旅館であれば部屋の「空き」があれば、すぐ決まるのですが、一般の民家になるとなかなか難しく、農家等は家が広いので、寝るのは良いが三度の食事が忙しく出来ない家が多く難題がたくさんありました。

人手「人夫」を探すのも同じで、しかも山奥での仕事となるとこれがまた難しい。

街のデパート等では人間の洪水ですが、いざ探すとなると居そうで居ないのが人間だ。

折角見つけて雇っても、わずか一日出て、あとは来ない人も沢山居ます。これでは困ります。山の中での仕事ですので、女性では無理です。従って賃金を多少弾んで待遇を良くしてでも探し出して、しかも上手に使う事よりありません。

それでも地元で探せない時は、やむなく函館市内から地方へ出て宿泊の可能な人を見つけ出す事にしたのですが、怪しげな「変なおじさん」達を従えての仕事で全くの素人なので、チンプンカン。手を取り足を取り説明しての不能率な事。

10日間で終わる予定の外業も20日以上もかかり、しかもあと味が悪くスッキリとしない。平均に高齢者が多く、熊対策や怪我の心配もありました。このような事がその後毎回ありました。

「熊の臭いがするぞ、気をつけろ」



そんなある時、森町の鳥崎川林道（現在の道道霞台森停車場線）の調査で森営署の土木作業員宿舎が山奥にあり、我々山賊共もお世話になる事にしました。

仕事も順調に進んだある夜、若者3人が車で森町の市街地へ買い物に出向いた。しかし、深夜遅くなっても戻らず、心配しながら寝て居ました。

やがて、車のエンジン音が聞こえるはずがシーン・・・静かに部屋の戸が開き、3人が部屋へと入って私の枕元に正座した。とその時、坂本氏が「瀬戸さん、俺髪を切って坊主になる」と言うのである。

話によると、この宿舎から100m位手前に、毎回何度も車の落ちるS字型の悪い魔のカーブがある。そのS字カーブを車が曲がり切れずに直行し、横転。そして数回転して法下へ転落したのだった。幸い3人共全くの無傷で無事でした。

翌朝、営林署土木の主任さんをお願いして、ダンプカーで車を引き揚げて戴いた。車は、屋根は潰れドアはへこんでガラスは壊れ、哀れな姿であった。しかし、走れる状態であった。

但し問題はこれから、当時の社長にこの出来事をいかに話すかが一番の悩みであった。

結局、その日の朝、何とか電話で深く陳謝をして、私のミスで事故った事にして何となく決着がつけましたが、その日の内に修理に出す為、函館まで走ったが、フロントガラスはなくホコリが入り、ウインカーも付かず、前輪はフェンダーにぶつかりハンドルが切れず、やっとの思いで函館まで帰りました。

この頃、当社にもフットボールチームを結成し、開発建設部と新川球場や赤川の水源地広場で長靴や地下足袋スタイルで親睦試合をした事もありました。

新入社員の山での「体験テスト」は、相変わらず続いていた。山でのテント生活をしたお陰で人工衛星も何度となく見る事が出来ました。

「相変わらず女性の姿は見えぬ山ばかり」



昭和46年(1971)6月東亜国内航空YS11型機「ばんだい号」が七飯町横津岳に激突し、乗員乗客68人全員が死亡しました。

林道調査も各営林署の実施計画の関係で流れがあり、東瀬棚管轄から今金、八雲、森、函館、木古内、桧山、江差、乙部と年度によって分けられ、この年代には木古内営林署管轄が圧倒的に多い発注年代であった。

木古内は何と言っても八雲の次に雨の多い地区で、他の地区に比べ外業日数も倍近くかかる。特に千軒地区などは雨の本場だ。これには弱りました。

木古内は柴崎旅館、知内・千軒は竹内旅館と、これまで27本の調査を手掛けてきました。又、巷では戸井町汐首地区の旧国道の不用物件調査もあり、多忙な連日でした。

昭和47（1972）初春冬季オリンピック札幌大会が開催され、ウインタースポーツの世界の強豪達が北海道札幌に集まり、連日、各種目に熱の入った競技を見せつけてくれました。社内ではこの頃、社員の一部で麻雀が大流行し、夕方退社後、会社のすぐ裏にあった雀荘へすっ飛んで行ったものです。

お昼休みには花札や囲碁、将棋等も盛んで、時間の超過で何度か社長に注意されてた事もありました。

当社の車の台数も6台から7台と増え、各車が毎日忙しく地方へと走り廻っていました。社員数も20人位になり、大世帯となった。

仕事の方も函館空港線の用地調査や今金町の旭台今金線の用地調査や木古内町役場の町道の実測線と次から次へと数の多い仕事量の豊富な年代でもありました。

テント生活も少なくなったある時、江差営林署の椴川林道調査で江差町のある旅館に宿泊中のことである。

この年の夏も猛暑続きで、伐開中大量のダニが異常発生し、衣服が真っ赤になる程取り付かれ、取っても取っても取り尽くすのが困難な位の大群であった。

ある日の事、宿に帰り、すぐ風呂へと向かった。先客が一人湯舟に漬かって居た。

脱衣所で我々山賊共も裸になり、衣類に沢山ついているダニを取り集め先客の脱いだ丹前等に付着し、おもむろに「お邪魔します」と中へと入った。

すると、なんと見るからに立派な一見セールスマン風の紳士であった。

大変な事をしたと思ったが、時すでに遅し。申し訳ない事をした。

その後、この紳士はダニに取り付かれ、大変な目にあっただであろう。測り虫も一生の不覚で、しばし途方に暮れた大失敗談であった。

そして昭和48年9月、知内町小谷石では集中豪雨による山津波での大災害が起き、何人かの地元住民の方が土砂の下敷きや家ごと海へ押し流されて亡くなりました。

我々も土現知内事業所からの依頼で災害調査の為、急遽出動する事となった。

車のフロントガラスに「災害調査隊」のステッカーを張り、パトカーの先導で土砂に埋もれた現地へと毎日向かいました。

現場は亡くなられた方々への花束や線香の煙が漂う中、数え切れない程の測量業者が必死の調査を続けていました。

もちろん我々も必死でした。山津波ですので、泥んこ状態で腰まで泥に漬かる場所も時にはあり、大変な作業でした。

色々な事があり、多忙な毎日を送っている内に昭和40年代も終わり、昭和50年代へと突入したのである。

「余興のトップに黒田節を歌う山賊のお頭」



そんな昭和50年（1975）秋、現在の社長、小林雄次氏の御婚礼を前に一部の社員が挙式当日の余興の練習を昼休みなどを利用して倉庫の中で開始した。

渡辺氏をリーダーとした音痴バンドグループを結成したのである。

グループ名も『ザ・ドボクターズ』と名付け、これ又怪しげな楽器の代用品を鳴らして一生懸命練習に励んだのですが、この特訓どうも個人的にスムーズにいかず、その後なにやらムニャムニャ……。

さて、結婚式当日（寒い日）私もこの晴の挙式に花嫁さんの実家、静内町からの出席者を乗せた送迎バスを式場まで誘導する役を頼まれ、市内万代町「ガス会社前」からホテル・ロイヤル迄の道のりを無事に誘導し、お客様を御案内する重要な任務を勤めた事を今も忘れず覚えています。

挙式は盛大で、しかも立派でした。しかし、問題の『ザ・ドボクターズ』が晴の本番での出演はどうしたかは、はっきりとした覚えがありません。

結婚後、度々山賊共と山へと御足労願ったもので、同じ沢の水を飲み測り虫の仲間入りをした。

体力抜群で他の人には負けない馬力の持ち主であったが……しかし、我々山賊が5分間位で歩く山の斜面を、なんと15分近くもかかり、汗だくで到達するという半馬力のプロであった。しかもこのプロにも問題があった。入山すると決まって必ずと言ってよい程、起きる出来事があった。

それは、虫に刺されたり、草やウルシ等に負け、顔や体や腕が腫れ上がって重傷患者に変身するのは、毎回の事ながら参りました。非常にお気の毒な事でした。今では平和なお顔で居りますが……。当時を思うと今は只感謝の気持ちで一杯です。

昭和51年頃からは、開発建設部や土木現業所、市役所等の発注が多くなり、林道調査も山へ入る社員が縮小され、ついには二人で乗り込み、他は地元で人夫を雇っての作業が多くなり、熊石町関内林道なども手元が無く最後まで大内氏と二人で制覇しました。

選点伐開が終われば測るのは二人でも上手に行なうと結構能率的には大差がありません。

ただ、数百本の測量杭を毎日背負って運ぶのが、辛かった。その後も脇谷氏と二人で何本もの林道を制覇したものです。

やらねばならぬ、やれば出来る……。

昭和51年9月ソ連軍のミグ25戦闘機が函館空港へ緊急着陸した。

この頃には社員数も多く、一階の事務所が狭くなり、二階も事務所に使用する事になりました。

私はこの時から現在の新社屋が新築になるまで10年位は二階で仕事をしました。部屋は畳の敷いた和室が二部屋で多い時には5人位も席を共にしたものです。

昭和52年春、上磯町茂辺地の戸田の沢林道で、またも集中豪雨で山崩れが発生し、測量センターが川へと押し出され全線再測で全く最初から測量の仕直しとなり、これも永い日数がかかりました。又、この戸田の沢と向かい側にある湯の沢附近は今も最高の熊の巣となっている処である。

昭和53年、この年から奥尻島へ渡り始めました。

山賊共も山また山で多忙となり、下界の仕事が余り出来ず冬期間だけのお手伝いが多かった。しかも、桧山営林署管内が最も多く、古佐内林道や雪崩の沢、金子の沢、沼の沢その他34本を次々と他年度に渡り攻撃をして廻り、以後五年間位は春から秋遅くまでやや一年中、厚沢部町館町に住み着いていたものです。

この年には、わが長男を学校の夏休み中、同じ厚沢部町の稲倉石林道へアルバイトに連れ出しました。

測り虫親子が山の中で蚊やアブに刺され、泥だらけになって働きました。息子も良い体験になったものと思います。

開発（港湾）より、樞法華港の一級水準測量を頼まれ、これは私が初めての体験でしたので、すごい緊張感でしたが、無事完了致しました。

又、冬は寒い松前町市街地の旧国道の区域調査や福島町千軒地区や知内町上雷地区の不用物件調査等で、しのぎ削る忙しさであった。

「田倉の沢での熊の証拠」



昭和55年、上磯町茂辺地のカノコ沢林道では、全くの熊の巣で、今はなき青函連絡船の汽笛や上磯のセメント工場のサイレンが聞こえる場所なのに、熊共は日中は林の中で寝て居て、夜になると活動を開始する。

毎日、作業終了後、三脚やテープを現地に置き帰ります。翌日、現地へ着くと、三脚もテープもポール等も、その置いた場所には無い。

人間の臭いのする道具で夜中に遊んでいるのでしょう。三脚は倒され、テープは遙か彼方へと引き延ばされ、困ったイタズラものでした。

翌昭和56年夏、厚沢部町・田倉の沢林道も熊の本場であった。

仕事の都合で昼飯が少し遅くなり、送電線の下で食事中、目の前の笹が風も無いのにガサガサと動き何やら巨大な物体の動きを発見。もしかしてと思った瞬間、わずか10m以内の処に突然熊が現れたのだ。

ビックリして斉藤さんの父さんと二人で大声で叫んだ為、熊は山奥へと逃げ込みました。多分、弁当の匂いを嗅ぎ付けて現れたのでしょう。その後も数日間、ガサガサと音が聞こえていました。

又、この現場は非常にクワガタも多く一日に30匹位も取りました。ダニも多い山で20mも歩くと腕やズボンが真っ赤になる程でした。

昭和58年5月26日、日本海中部沖地震が発生、この地震による津波が奥尻島へ押し寄せ、青苗地区が多大な被害の痛手を受け、当社も社員5名ほど現地へ緊急出動し、土現奥尻事業所で缶詰状態となり、昼は災害調査、夜は徹夜で図面作成と必死で行われました。

この時、生まれて初めて余震による津波を高台に避難してしみじみ観測いたしました。ちょっと恐ろしい気持ちでした。そして、この年の6月10日、前社長が法務大臣より名誉ある表彰をお受けになった年でもありました。

そして、この年の夏、長万部町双葉の大峯双葉線の雪崩防止工事の用地測量があり、現社長と二人で日本の名湯ラジウム温泉で共にしました。

天候が悪く、晴れる日が少ない湿った日が続き、おまけに現場は急傾斜と標高があり、伐開や基準点で能率が上がらず、高校生のアルバイトを上手に使用して、二人で難航をしました。

温泉に漬かり、夜には宿の前にキタキツネが出現して、カランカランと鐘が鳴ると食事をする。何の楽しみも無い温泉泊まりの山賊暮らし、そしてここでも社長様ウルシに負けて大変身。長万部町の病院へ緊急発進した事もあり、バインダーで顔を隠しての御来館であった。

そんなある日の夜、会社より電話があり、社長のお子様が舌を噛み切ったとのこと。これは一大事と深夜、長万部の山奥から函館まで、これまた緊急発進。おんぼろトラックでよくぞ走ったものです。幸い大事に至らずでホッと安心致しました。

そして、開建の函館新道の用地調査が市内昭和町ホテルオークランド前から桔梗駅前通り上まで行われ、数々の問題が多く難航し、永い日数をかけた測量でした。又、土現の土台高調査等も発生したころであった。又、土現管内道道の交通量調査なる珍種も初めてお目見えしたこ

「ガリッと間違いなく機械見れよ！」



ろで、全く初めての仕事なので要領がつかめず、ただ大騒ぎするばかり。
大量の人材の確保や道具等、作業内容や手順すら分からず、どうするこうするとワイワイ騒ぐ
だけ。苦勞しました。

結局、いざ本番になり所定の場所で観測を開始すると、さほど当初思っていたより恐ろしい
ものではなかった。現在では何とかこの仕事も板に付いたようです。

翌昭和59年、これまで約29年間に渡り続いてきた林道調査も最後の一本を残すのみとな
りました。

最終は、松山営林署管内の厚沢部町の帰来別林道であった。現社長の御足労を願っての最後の
山となった。

林野庁の仕事が急に減少したのも林道網を山の奥へ奥へと延ばし過ぎて天然林を容赦なく切り
まくり裸山とし、製材にした製品は外国産のラワン材等には及ばず、また裸山に新たに植林を
しても人工林が成長するまで30年から60年かかると言う夢のような年月がかかる。

その間、人間による手入れや維持管理の手間数を考えると気が遠くなります。従って詳しい内
容は分かりませんが、何等かの行詰を生じた姿となった。

永い永い山賊生活にも、ついに終止符を打つ時がやって来ました。

山賊連合もこれにて解散を余儀なくされたのだ。

従って、その後二度と大自然の山はお頭を呼んではくれないだろう。

想えば苦しかった事、楽しかった事、色々山ほどありました。

片道にして約380kmを越す距離をよくこの二本の足で歩きました。

体に歩行距離計や万歩計でも付けていたなら、物凄い距離や歩数であったでしょう。

今になれば、みんな懐かしい思い出ばかりです。

山奥のきれいな空気と水に馴染んだ測り虫には下界での生活はどうなのか。山が呼んでるぜ。

しかし、永久に呼ばないだろう。最高に寂しさを感じます。

子供の時から大自然や草花、樹木が大好きで暇さえあれば野や山へと夏も冬も歩き回るのが何
よりの楽しみであり、趣味であった。

山菜採り、キノコ採り、山ブドウ・コクワ採りと色々な楽しみが消えた。大自然の山よ、さよ
うなら…。

昭和59年秋、土木現業所の発注で管内の道道の道路台帳図作成業務が3年計画でスタート
した。

初年度は大沼公園線を始め、大沼公園鹿部線、函館南茅部線、他で各路線附近の三角点に登り、
対空標識を設置。

基準点標定点の設置等と全く初めてで不慣れな作業に目眩がするばかり。

総延長数百軒にも及ぶ道道を一路線毎にあらゆる資料を基に図面と調書にまとめて仕上げる作

業である。

外業もまた大変で標定点が設置終わると飛行機による上空から写真撮影が行われ、これにより図化されて図面の作成が始まる。

地上では基準点測量を行ない、航空写真を基に各路線の縦断を行ない、また写真にない信号機や道路標識、作工物等は現地調査により調査する。すべて、これは徒歩である。何十軒あろうが！

縦断測量も長距離路線が多いだけにやりがいがあった。

縦断、最初のコースは大沼公園線で寒風の中15.0軒の冬の大沼湖畔一周レベルマラソンであった。非常に寒かった。

現調は道路の雪をスコップで取り除いて、巾着や作工物を調べたものです。

続いてのコースは大沼公園鹿部線、国道5号線、西大沼小学校前をスタートして東大沼、鹿部町宮浜を通り、なんと鹿部駅前までの約30.0軒。これも寒風の中、駆け足で制覇。一日平均10.0軒は歩くのだ。

昭和60年は中野木古内線からスタートして、次は熊の巣として有名な上磯厚沢部線へと向かった。

この路線では三角点を探すのに難航した。七月でもまだ沢中には残雪があり、上磯側（茂辺地）の魔の不二山、厚沢部側（館町）の消えてなくなる幻の三角点佐助沢と基準点には苦労しました。

縦断測量も42.0軒をこれまた駆け足で行ない、毎日熊の巣の中へと通いました。

その後、奥尻島線へと向かった。ここでも基準点、標定点設置で苦労しました。

縦断測量も島一周が約67.0軒で、初日フェリー乗場をスタートして体力に物を言わせて一気に青苗岬を折り返して、奥尻空港附近まで約18.0軒歩き続け、足の裏に豆が出来、痛みだした。我々、歩きプロでも足が痛いのに、一緒に付き合っ歩いて戴いた標尺マンの女性二人組は足が棒になった事でしょう。

翌日、また足の痛みを堪えて、ただひたすら歩き続けるだけであった。

やがて、島の北部に当たる八十八曲がりには達した時は、急カーブと急勾配の為、T.Pの連続で高さは進むが距離が進まずと言った具合で、時間ばかりが進行して気をもむばかり。しかも、連日風に向かってレベルを観る目が次第に赤く充血し、やばくなり、痛みを増してきた。しかし、人間は忍耐力が必要だ。何とか我慢をしてスタートから七日目ころに島一周耐久レースは終わった。

さらに次は現調が残っている。また、島二周目の旅へと立ち上がりスタスタと歩き出したのである。

こんな時、仕事も重なるもので、今度は球浦の実測線調査が発注になり、この仕事も制覇し、

十一月には長男の結婚式があり三日ほど我が家において、すぐまた島流し。どうやら、この年は一年中島暮らしをした感じであった。

そして昭和61年、台帳図作成業務最後の年、八雲北檜山線から始まり石崎松前線と進行した。この路線も熊の巣の中を長距離約67.0軒をモクモクと歩き続けました。

その後、湯の里知内停線等で何とか全路線を制覇致しました。よくぞ二本の足で歩いたものだ。

丁度このころ、函測協の運動会が毎年九月十五日（敬老の日）に行なわれ、三年か四年続きました。

仕事で延々と歩いたあとに、今度は真剣に本気で走らねばならぬ。

往復約2.0軒のコースでレベルによる各社対抗水準測量競技やグッピーでの角度、距離をいかに早く正確に行なうかの精度を競い合うものや綱引き、各社対抗リレーと楽しい一日を過ごしたものです。

「タイヤよ勝手にどこへ行く！」
(函測協運動会)



「道路台帳は、やってもやってもあるすら」
(2階の部屋)



三年続きの道路台帳図作成業務も何とか一段落して、ホッとしたのも束の間、この年の暮れには新たに道路台帳補正業務が発注になり、改良工事や災害復旧工事等で路線の中で変化した箇所を直す業務で各出張所毎に発注し、現在も尚、毎年行なわれています。

昭和62年、戸井町バイパスの一筆測量があり、二千本以上の杭打ちの嵐であった。

その後、砂原町紋兵衛砂原海岸侵食調査と長万部川（双葉地区）の河川地形測量、厚沢部川河川地形測量と多忙な一年であった。翌昭和63年（1989）春、昭和天皇が崩御なされ時代は昭和から平成へと年号が移り変わり、新時代の夜明けとなった。

この時、現社長は人生一世一代の大事業である社屋の新築工事に乗出した。一日も早い新社屋の落成を心待ちにする毎日であった。

又、上磯町戸切地川の地形調査も同じ年に行なわれた。函館市の市道及び下水道の調査設計業務も本格的に発注になり現在も尚続いています。

そして、平成2年函測協の函館港祭り協賛の万人踊りパレードに各社で参加して御神輿を引いて練り歩くと言った行事も始まり、数年間続いたようです。

又この頃、函館新道（七飯町大中山地区）の用地測量もあり、リング園の中をお邪魔して歩いたのもつい最近の思い出です。

更に、土現事業課より管内の交通事故（原票）と言う珍種の出現もこの年からで今でも毎年「車社会」のある限り現れる珍種であるが、最初は何が何やらで全く分からず、住宅地図と道路台帳図を拡げ町名、地番とでにらめっこ。

路線と事故発生地点の確認すら大変な苦勞で気の遠くなる作業でしたが、現在では若干手慣れてきて、何となくスムーズ？に出来るようになった気がします。

それにしても毎年増え続ける膨大な交通事故の件数には、この調査の度にただ驚くだけです。

又、同じ事業課から管内の街路の植栽及び道路照明の現況調査と立待岬函館停線（函館山）の縦断測量、市道の土台高等もこの頃行なわれました。

平成3年頃から久根別川河口からの大規模な現況そして縦横測量が数年間に渡り続行され約17軒に及ぶ大測量であった。

そして、奥尻島球浦海岸の地形測量、城丘江差線の交安施設の実測線と一生懸命歩きました。

平成5年（1993）1月25日、会長（前社長）の逝去。

私共永い年月、我が父親以上に親しんで来たお方で温厚で人の面倒を良く見る人情深い立派な人柄で偉大な方でした。

そしてこの年、現社長が永年の念願が適い、見事土地家屋調査士に合格。万々歳、目出度し目出度し、新社長誕生。

その瞬間パッと社内に光が差して一際目の前が明るくなるのを感じました。

又、同じこの年7月12日「北海道南西沖地震」が奥尻島を襲った。

死者行方不明者230人にも及ぶ大災害となった。



それにしても最近の数年間では、日本道路公団の北海道縦貫自動車道の用地測量やそれに伴う立木調査や函館空港の拡張工事に伴う各種の測量等、数多くの分野を抱える規模を誇り、目覚ましい当社の飛躍と発展ぶりには全身に感動を覚えます。

そしてここで新世紀を迎え、時代は大きく変化する21世紀へと突入いたしました。

想えばつい数年前まではすべての作業が手作業でありましたが、今では何から何までが近代化され、そして機械化され、当時を想うとまるで夢を見ているようで、ただ驚きと感動で啞然とするばかりです。

昔は子供が大きくなるにつれ手に職を付けなければ役にたたないと言われてきました。しかし、現代人には昔の職人とは違い肉体的に楽をして飯を食う食人となった。

私は今、50年と言う永い年月を振り返り先を見ると、永いようで過ぎ去って見ると短く感じます。

何事があってもいつも笑顔満開で、もくもくと過ごしてきた事で満足を感じています。

やがて測り虫もあの幼かった幼虫時代から成虫として若者に育ちそして山賊の（お頭）に立候補して山から山へと食い荒らし、山の熊どもにも無視された虫は50年の年月を費やし、今後は山の化け物として残った全体力の続く限り餌を求めて、但ひたすらにヘッコラヘッコラと歩み通し、次は海外いや世界中そして宇宙への道の実測線調査へと向かって前進するのである。



そして測り虫はいつの日か再び公害のない豊かな大地に舞い戻り山賊暮らし出来る日を楽しみに…………。